フランス見たまま

(1)
大学の話・技術者の生活

山田正春

フランス滞在中には　ホテル住まい　アパート生活さらには一般の民家にも宿泊し　かなりの期間は1人きりになってフランスの生活にとけ込んで過ごした　そしてパリだけでなくフランスの各地をめぐって　パリや地方の生活　フランス人の生活態度や物の考え方　さらにフランスの当面するいろいろの問題等　フランスの他方面にわたって観察することができた

今回は　そのうち大学の話　技術者の生活等について述べることにする

学制および大学について

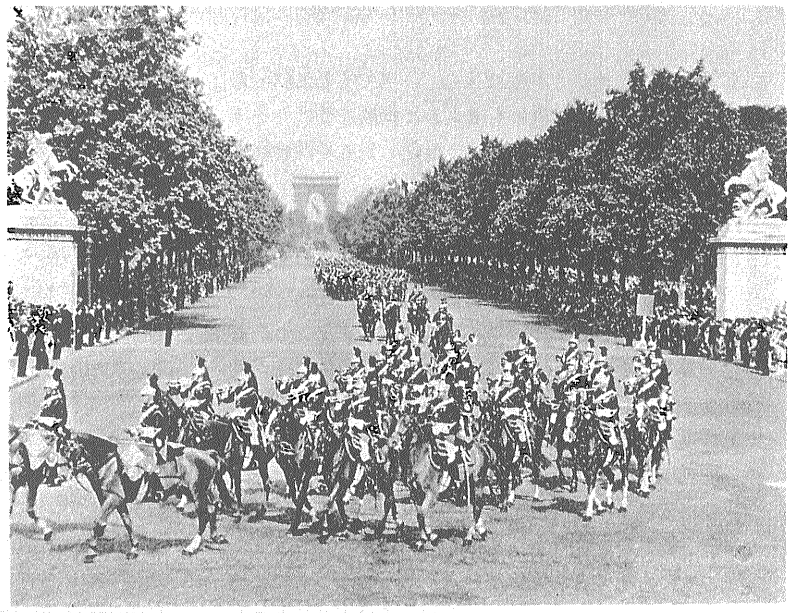
フランスの学制は　だいたい日本と似ているが　いくらか顕著な相違がある．まずバカロレア（Baccalauréat）と称する大学入学資格試験があって　この試験に合格しないことには　大学に入学する資格を得ることができない．　筆者の滞仏中　ちょうど1961年4月に高校教師が待遇改善をとなえてストライキを行なった時　知りあいの高校生が面白いことを言った．　すなわち「ストライキのためにバカロレアの試験を行なわないなら全員を合格にするか又は全員を落第にするかどちらかだろう．しかし全部を落第にするのは不穏当だから　たぶん全員合格させるだろう」

ドゴール大統領の重要政策の1つに教育の充実向上がある．　アルザス等の北部地域（ドイツ領になったり　フランス領になったりしたが　第2次大戦後フランス領）や　南部スペイン国境地域（18世紀ころからフランス領になった所もあり　スペイン系が多い．）等ではとくに標準語の浸透に努力し　教科書もより高度なものに改変され　1961年に高校を卒業するものが旧教科書の最後で　次の年から新しい教科書で勉強している．　したがって　くだんの高校生は　もし落第すれば教科書から全部買わねばならないのでたいへんだから　どうしても合格したい．　そして彼なりの推定を下してストライキが長びくことを願っているというのである．

だいたい学校の試験は　面接試験の多いのが特徴でこのため小さい時から教師に相対し　1対1で自分の考えを述べるという訓練を受けているわけで　国民性の形成に大きな力となっていると言えよう．　学位論文も同じで　申請して適当であると判断されると　学部の前に何月何日○○氏の学位請求講演があると公示される．教授や斯学会の人々のほか　家族・親類・知人等も傍聴する．　そして講演後　討論の末有資格者の投票によって学位授与が決定するとのことで　フランスでは学位を持っている人は少なく　かなりむずかしいようである

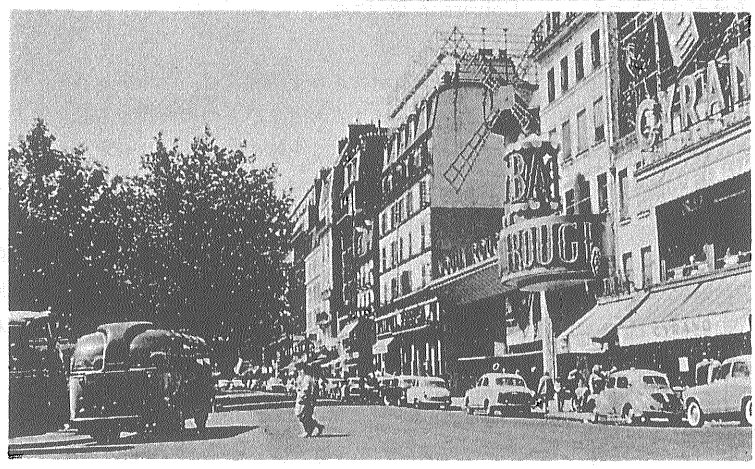
パリの小学校　高等中学校での一般的傾向として　日本人の家庭の子女は　だいたい成績が良いということである．　フランス人も勲章好きな国民で　学校で良い成績をあげるとバッヂをもらってつける．　さらに学年として良い成績の時は　昔の日本陸軍の参謀のような肩章をもらってつけるといった学校もあり　筆者の先輩や知人の子供さんはたいていつけていた．　一般にフランスで　かって著名な数学者や物理学者が輩出したのは　フランス語の数で　たとえば80は4×20（Quatre-Vingts）90は4×20+10（Quatre-Vingt-dix）等と　小さい時から数学的な基礎訓練を経ていることが大きく影響しているとされているが　日本人の子供さんが　皆とてもよくできる事実を知って　ちょっとほほえましく思った次第である．

大学は数多くあるが　日本と根本的に異なる点は　すべてが国立で私立大学がなく　小学校　高等中学校でも一部に宗教関係の私立学校があるのみである．　また大学という呼称を冠することもまれで　パリ大学（Université de Paris）等ほんの1部にすぎない．　大学は地方にもかなりあるが　学生数　講座数　教授陣等の数では　パリ大学が圧倒的に大きく　ちょっと古いが1929年の資料によれば　パリ大学の学生数　27,000人（うち外人　6,480人）に対し　地方大学の総計の学生数は22,400人（うち外人　6,900人）である．　しかしいわゆる「格」としては　パリ大学は日本で考えられているのと違って　さらに格の上の秀才教育をする学校が2つある．　それは l'Ecole Normale Supérieure（レコール・ノルマール・シューペリエール：日本では高等師範学校と直訳されている）とl'Ecole Polytechnique（レコール・ポリテクニック：工科学校と直訳されている）で　前者は文科系　後者は理工科系として有名である．　これらの卒業生は若くして指導的な地位につき　著名人はほとんどこれら



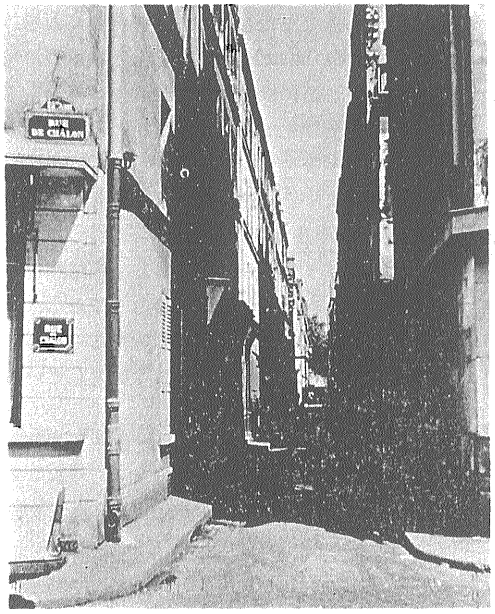
▶ フランス国祭日（7月14日）のシャンゼリゼ通での祝賀行進

パリのモンマルトルにあるムーランルージュ（Moulin rouge）ここでは1960年秋から1961年春にかけて日本の余田ダンサーズが出演していた ▼



▼ 1635年から1642年にメルシイエ（Mercier）によって建てられたソルボンヌの礼拝堂（Eglise de la Sorbonne）でパリの有名な記念物の1つとなっている
この建物は純粋のジエスイット（Jésuite）様式で内部には1694年にジラルドン（Girardon）の設計になる白色大理石のリシュリューの墓がある

▼ パリ　リヨン駅近くの典型的なウラまち
ここには数軒の中華料理屋がありよく食事に通った



の卒業生で　フランス小説にもよく出てくる名前である．　したがって昔は何年も浪人して試験を受けたそうだが　今は規定の回数（5回？）落第したら受験資格を失なうとかである．

l'Ecole Polytechnique は　ナポレオンの創設によるもので一応軍の学校であるため　在学生は全部軍籍に入り　7月14日の国祭日（Fête Nationale：日本では映画の題名にちなんで　パリ祭と称される）　には　シヤンゼリゼ通りを先頭にたって行進する．　ここの卒業生は　一般にポリテクニシアン（Polytechnichien）と呼ばれ　学校では数学　物理　化学等を集中的に学び　卒業後は軍関係のほか　最近では一般の理工科系の役所　公団　民間会社等に就職することがとくに多くなり　若くして重要なポストに登用され　フランス女性のあこがれのまとであることは　今も昔も変らない．　たとえば　すでに述べたD. R. E. M. の長である Mable 氏はポリテクニシァンで　32才で長となり　1961年に36才であった．　そして次長の　Lecocq 氏は　パリ大学出身ですでに60才を越えていた．　自由・平等・博愛を旗がしらとするフランスには　およそ似つかないこの現実をみて驚きいった次第であるが　この制度は　おそらく今後も長く続くであろう．

B. R. G. M. や D. R. E. M. の地質技師に　これを何と思うかと質問してみると　皆が皆「何とも思わない　彼はポリテクニシアンだからね　われわれは現在を楽しむ余裕を持っており　仕事には情熱を持っている　そして将来に対する不安はない　他人のことには関心がない」という　しかしこの事実は　その後筆者が見聞したヨーロッパの他の国々たとえばイギリスやスペイン等に比べてはるかに合理的で　いちがいに非難できないことを知ったが　それらについては　いずれ別の機会にふれることとする．とにかくフランスでは　実力さえあれば　努力次第で家柄に関係なくこの種の学校に入学でき　洋々とした未来を得ることができるのである．

パリ大学は一般にソルボンヌと呼ばれることが多いが正式にはパリ大学（Université de Paris）で　ソルボンヌという呼称の歴史的意義はあまり知られていないようなので　それについてちょっと述べてみる．　中世の頃の学校は　日本では「子曰く‥‥」式の孔孟の教えや仏教等宗教的なものが主であったのと同じく　ヨーロッパでも神学を学んだものである．　パリにおいても　ラテン語で神学を学んだのが当時の学校の実態である．　現在パリに　カルチエ・ラタン（Quartier latin：ラテン区）という東京で言えば本郷　神田界わいに当たる学校まちを主とする一区画があるが　これはラテン語を話す人々の住む一画　すなわち神学校地帯に名づけられたもので事実1790年頃まではラテン語を話していたとのことである．

1257年に　サン・ルイの技師ロベール・ド・ソルボン（Robert de Sorbon）が　ルイ9世から提供された土地に学問所を設けた．　そしてこの学問所はパリの守り神である Sainte-Geneviève ――アッチラの侵略からパリを守った女性――　の丘のあたりに広がっていった．　その時以来この学問所の一画が　ソルボンヌと呼称されるようになった．現在では　このソルボンヌにおさまっているのは　文学部と理学部のみで　他の学部は　さらに外に発展している．　したがってフランス人の間では　パリ大学の文学部か理学部へ行っていることをソルボンヌに行っているというわけで　フランス語でも　厳密には Université de Paris à la Sorbonne と言っている．

今でもソルボンヌの玄関前には　ソルボンヌの　礼拝堂があって　パリにおけるひとつの由緒ある記念物となっている．　なおパリ大学の各建物は　日本の大学のようにへいで囲まれ芝生や木立を混じえて建っているということはなく　一般の建物と同じく道路に面しており　道路側の入口には　各入口ともその通りの番地を示す標札がかかっているので　教室を探すにも　何通り何番地の入口から入って何階と教えられれば　しごく簡単である．　大学祭（Fêtes Universitaires）は11月28日で　これはルイ11世によって定められたものである．

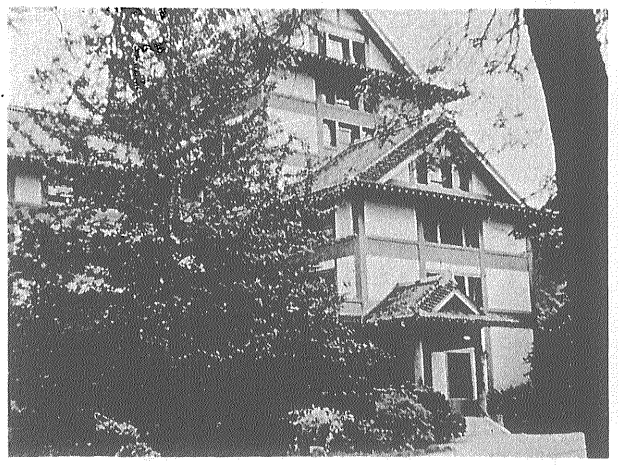
パリ大学の大学都市（Cité Universitaire）は中世の頃から有名であったが　現在はパリ南部14区に位置し　ロックフェラー氏の寄付になる国際学生会館があり　さらにロックフエラー通りをはさんで各国の会館がある．日本館（Maison du Japon）は　ちょっと日本のお城を思わせる建物で　ここには定員の3分の1の外国学生と3分の2の日本人留学生が住んでいるが　ほとんどがフランス政府から奨学資金（月400　新フラン：29,200円）を支給されて勉学している人達である．　残念なことに地質・鉱物関係の留学生は1人もいなかった．　なお　各国の会館はすべてパリ大学の支配に属し　各館長は定期的に会合してよりよき運営のために努力しておられる．そして各国の留学生は　お互いに催しを行なったり　旅行したりして親ぼくと理解を深めるよう努力している．

フランスの大学は　地質学・鉱物学に関するかぎり日本と異なりそれぞれに顕著な特色がある．　たとえばパリ大学は岩石学・鉱物学・層位学等のいわゆる基礎的

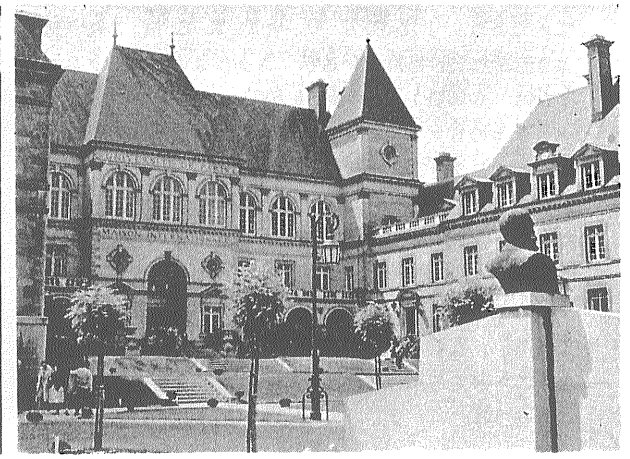
なものをとおとぶ傾向がある．　ナンシー大学はルーボー（Roubault）学長がウラン鉱床の権威である関係からか　主としてウラン鉱床を専攻する学生が多く　顕著な校風をなしている．　また南フランス　モンペリエの大学では層位学　古生物学が　中部フランス　クレールモン・フェロンの大学では火山学や岩石学がさかんで　火山研究所が併設されている　等々である．　したがって卒業生も　それぞれの分野で活躍しているわけである．

たとえば D. R. E. M の地質探査部長 Lenoble 氏以下地質技師の8割はナンシー大学の卒業生であり B. R. G. M. の研究部では　パリ大学の出身者が非常に多い等となっているわけである．

一般にフランスには　英・独学派に対する根強い対抗意識があり　学術用語などにも　英・独学派の用語と同じつづりで　意味が全く異なるというようなものもかなりあるが　それが世界で一般に使用されているものであっても　決して改めようとせず　フランス地質学会誌や同鉱物学会誌のように国際的な学術雑誌には注釈をつけるが　国内で出版される図書やパンフレット類には　その注釈さえつけない．　Granulite が白雲母花崗岩であったり　多くの例がある．このことはヨーロッパのように多くの国が短距離で国境を接するのに　お互いの国語



▲ パリー大学都市（Cité Universitaire）にある日本館（Maison du Japon）の正面



▲ パリー大学都市の国際会館　この建物はロックフェラーの寄付によるもので大食堂をはじめ多くの設備がある

▶ パリーラテン区サンジェルマン通り（Boulevard Saint Germain）とサンミッシェル通り（Boulevard Saint Michel）の交差点をゆき来する学生たち　中央（黒衣）に神学生の姿もみえる

を尊重して　たとえ知っていても他国語を話したがらないのと同じく　長年にわたる征服　被征服でつちかわれた自国意識過剰（表面的には別だが）に起因すると考えられるが　反面わが国のように国語を軽視して　やたらに外国語を取入れたり　自国の真の価値を認識することなくして　べつ視する傾向のある多くの人々には　おおいに警鐘になると思う．

技術者の生活

―給　与―

フランスも日本と同じく級号（Echelle）の規定があって　大学を出て就職すると規定の級号に格づけされる．しかし大きな特徴は　卒業した大学によって級号が違うことである．　B. R. G. M. や D. R. E. M. の初任級は3階級に分けられているが　Aクラスのポリテクニシアンは　3等級1号（本俸約8万円）　パリ大学やナンシー大学等のBクラスは2等級1号（本俸約6万5千円）その他のCクラスで1等級1号（本俸約5万円）と　同じように大学を出ても　出た大学によってこんなに開きがある．　だいたい1等級1号と2等級1号　2等級1号と3等級1号の差は約3年にあたるので　AクラスとCクラスでは初任級においてすでに6年の大差がつくわけである．　さらに大学卒業前に義務として現場研修を行なうことがあるが　その研修期間には約3万5千円の給与をうける．

筆者が　ボア・ノアールにいた時来ていたナンシー大学の研修生は　宿舎費が無料で　1日約200円の食費を必要とするのみで　だいたい研修に入る時に結婚するのが普通で　彼も研修直前に結婚して　シトロエン2馬力の自動車を持っていた．　ただし物価は　日本より安いもの　高いものもあるが　平均2～3倍とみるのが妥当と思われるので　その見地で上記の数字をみていただきたい．　以後はだいたい2～3年で規定の昇給をたどるわけであるが　住宅手当は無料で　宿舎を支給される場合（暖房費を含む）と　一定の金額（だいたい5人家族で7～8万円位）を受取って自分でさがす場合の　2つがあるが　後者は地方勤務者に多いようである．

家族手当は　ドゴール大統領の人口増加の政策によって非常に恵まれており　子供3人というのが最も有利（25%）であるが　3人以上の場合は家族手当のほか買物　乗物等が半額となり　半額は政府が負担することになっている．余談になるが　子供を3人以上生んだ婦人は　多産家証とでもいうべき証明書を持っていて　たとえばメトロやバスの中で　その証明書を示されたら必ず席をゆずらなければならいなことになっている．　大学を出て13～15年の子供3人という地質技師の月収は　住宅手当を別として　だいたい20万円位とみていいだろう．

―勤務状況―

フランスは　いま日本で問題になっている週40時間勤務制が実施されており　勤務時間は1年を通じて変らない．　夏でも冬でも朝8時から12時まで　昼休み2時間午後2時から6時までが勤務時間で　土曜　日曜は原則として休む．　原則としてというのは　たとえば地方勤務等の時には　その長の判断で週40時間勤務の範囲内で土曜日を午前中勤務する代わりに　毎日少しづつ早く終ることが認められているからである．

夏も冬も同じ勤務時間であることは　パリの緯度が東京よりはるかに北に位置するだけに　夏と冬では日の出　日没がずいぶん違うのでわれわれにとっては　とてもなじめない．　冬は日の出が8時30分～9時　日没が4時～4時30分で　朝夕星をいただいて出勤し退庁するわけである．　昼休みの2時間は　彼らの食事を考えてみればまず当然であろう．

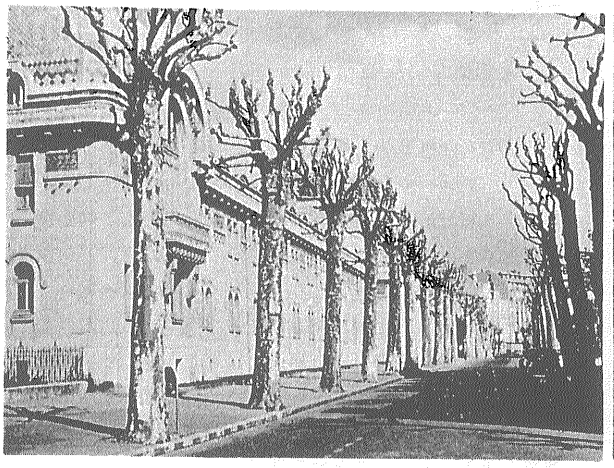
だいたい4～5品のコースの食事をとるが　その間の長いことはいらいらさせるが　彼等はその間　おおいにおしゃべりをし　かつ楽しんでいるわけである．　欧州の生活のテンポの遅いことは　われわれには驚きであるが　まず最初に食事で忍耐を学ぶといった次第である．なお　すべての役所　会社には必ず食堂があり　それぞれの機関の補助のもとに市価の3分の1位で食事できる　所によってはいくらかの差があるが　だいたい150～200円程度で　例外として Fontenay-aux-Roses の食堂では筆者は　フランス政府給費技術協力招待生であるという理由で　パン代　約55円を支払うのみで食事できたのは意外であった．　なお　勤務時間中は　日本のようにお茶等の飲み物が出ることは一切なく　ちょっとわびしいものであるが　これも慣れればなんともない．

フランスでは　人口問題ともからんで女性の職場進出がとてもめだつが　とくにマダムが多い傾向がある．一般に女性にできるような職種は　ほとんど責任を持たされて女性が担当している．　したがって日本のように結婚まで勤務するとか　また使用者側でもある程度年令に制限を加えるといったようなことはなく　女性だからといって別に不利なこともないようである．　このことは技術関係の職種にも言えることで B. R. G. M. や D. R. E. M. でもかなりの女性技術者がいることは注目す

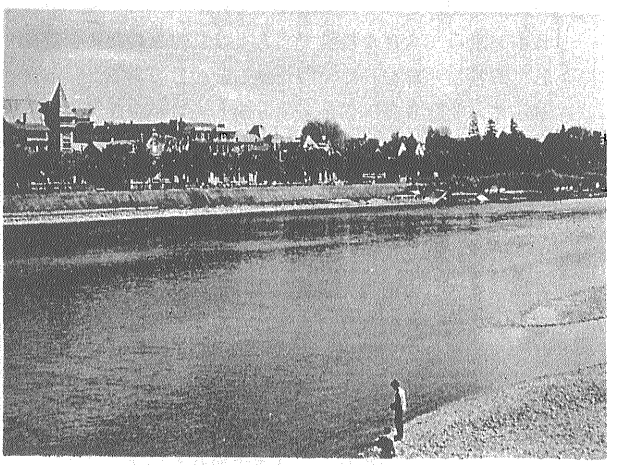
べきで　とくに岩石学をしている人が多い傾向がある．l'Ecole de Prospéctiom の教授を兼ねる D. R. E. M. Crouzille 支所のサルシア（Sarcia）夫人や Fontenay-aux-Roses のロマンシエ（Romencier）嬢等は　確固たる地位を築いていて　岩石学研究室の長として多くの男性を指揮　指導しながら有意義な研究を行ない　その成果も多くの学術雑誌に発表されている．

なお　フランスでは　物価と給与のバランスからみて自動車が非常に安い（ルノー公団のドーフィーヌは外人割引で750ドルで買える）ので　男性はもちろん女性でもまともな職業を持っていれば　まず車を持っている．

とくに地方勤務の場合は100%近いが　パリでは通勤の経路によっては　メトロやバスまたは専用通勤バス等で通勤する人もかなりいる．　だいたいフランスでは　道路工夫等が作業終了後シャワーでからだを洗って　さっそうと自家用車で家路に急ぐといった図は　普通みられることである．　このことは　日本と違ってまち作りの根本的な相違にもより　とくに地方では　バスの発達も日本よりはるかに劣り　自転車のようなものとして利用しているのであって　必ずしも比較できないことかもしれないが　ひとつの傾向としてみる時には　何らかの暗示を与えるものといえる．



▲ ビシー（Vichy）に数多くある温泉療養所の1つでイドロテルマール（Hydrothérmale）の看板がかかっている　日本式にいえばすべて冷泉で　この冷泉は胃腸病にきくとか　ビシーの名で広く市販されている　この町には2～3カ所に無料で飲める所がある　シーズン中は世界中のおもな新聞や菓子が販売されるがたまたま菓子店で日本の菓子をみつけてなつかしく思った



▲ ロアール河の支流　アリエール川畔からみたビシーの温泉保養地　温泉ホテルの手前の川岸には　公園あり遊園地ありで　美しい風景である

▶ ビシーの近くシャツテル・ギイヨン（Chatel-Guyon）の温泉保養地ビシーが日本の熱海なら　ここはまず伊東といった所　中央の建物はカジノ（Casino）で保養客はここでルーレットやプール等を楽しむ

— 休　暇 —

フランスの勤務は前述のように　土曜　日曜を休み　週40時間とかなりゆったりしており　さらに祭日は日本の約2倍の16日あって　日曜日に祭日が重なった時には翌日の月曜日に休む習慣がある．　その他の休暇としては4月のパーク（復活祭）・夏休み・クリスマス・新年等がある．

パーク（復活祭）の休みは　学校等は2週間位休むようである．　夏休みは　本国勤務の人に1カ月　外地勤務の人に原則的に2カ月で　勤務の状況によってさらに多くの休暇がとれるようになっている．　この夏休みは日本と違って大きな特徴で　人々は夏休みのために節約して貯蓄し　おおいに休暇を楽しむわけである．　したがってパリは6月下旬からすっかり人口が少なくなりおもなオペラや劇場は閉鎖するようである．　この間外地勤務の人々は　温泉保養地　——日本でいえば　熱海や伊東にあたる——　ビシー（Vichy）や　シヤッテルギィヨン（Chatel-guyon）等にどっと押しよせるので　ビシーなどはシーズン中には人口が数倍にもふくれ上がるとのことである．　本国勤務の人々は　南フランスの保養地やスペイン　ポルトガルといった物価の安い国へ行っておおいに楽しんだりスイス　イタリーや　中には北欧へもでかけるようで　これらの避暑地は夏になればごったがえし　ホテルも予約なしではまず取れないようである．なお　官庁や研究所では　お互いに少しずつずらして休暇をとり　全員がいなくなるようなことはないようで　とくに地方の小人数で構成される機関では　かなり前からお互いの休暇計画を出し合っているようである．

クリスマス（ノエール：Noel）には　日本と違って乱ちき騒ぎもなく　まずは神妙に宗教的な行事を行なって知人の招待をうけたりしてすごすようである．　またこの時は外国人を家庭に招く習慣があり　筆者の友人でもわざわざカトリックのさかんなノルマンジーやブルターニュの民家にでかける人もかなりいた．

そして大みそかは　この1年よ　サヨウナラ　というわけで　おもな記念物の前には中世の衣装をまとった学生たちが大勢立ち　ちょっと茶目気を感じさせる．　夜12時になると　まち行く自動車は全部　ひごろ禁止されているクラクションをひときわ高くいっせいに鳴らしてある人は良き年であったことを　ある人は悪しき年であったことを　それぞれが思い思いの感概をこめて去る年に決別のクラクションを鳴らし続けるのだが　いやその音のうるさいこと．　さらには　車の天井をあけてからだを乗り出して　ゆく年に別れを告げる若者もいる．

とにかく年越しソバを食べて　静かに過ぎ去らんとする1年に別れを告げるといった日本の習慣に比べて　フランスらしい茶目っ気を感じた次第である．

お正月は　ふつう花を持って　親子・兄弟を主に　さらに知人や友人を訪問するようで　まちには左手に子どもを抱き　右手に花たばを持って　手を上げてタクシーを呼ぶ人々が多く　実に明るい感じをうける．　在留邦人たちは　大使公邸で開かれる新年の祝賀会にでかけ　友人　知人　先輩たちと一緒に久しぶりに日本式のおせち料理や　すし　それに清酒をも味わって　遠く故国の新春をしのぶのである．

— 停年および恩給 —

この問題について述べる前に　職業に対する考えかたにわが国とは根本的な相違があることをしるさねばならない．　ドゴール大統領の重要政策の1つに完全雇用がある．　したがってフランスでは　自分の最もこのむ職業を選ぶことができるわけである．　まちかどでハーモニカを吹いて物ごいをしたり　メトロの構内にタムロする人々は　勤労意欲がないわけで　フランス人はわれわれにいつも　あの連中には絶対にほどこしをしないで欲しいという．　かえって彼らのなまけ癖を助長するにすぎないからだ．　職場においても　日本のように途中で職業を変えるということは想像できないらしく　それならどうして最初からそこへ行かなかったのかというのである．

停年は　官庁で　60才　民間で　65才というのがふつうで　これは同国の平均寿命　60～65才に一致する．
恩給年限は30年で　恩給額は最終額の　80％である．
したがって大学を出て自分に最も適した職業を選び　仕事に情熱を持ち　生活の不安もなく勤務して恩給年限になるころに停年となる．　そして　80％の恩給を支給されて老後の不安もないというのが実状である．

なお　社会保障の完備していることは　よく知られているところであるが　事実　筆者も　フランス大蔵省でかけてくれた無料健康保険のほか　Fontenay-aux-Roses にいた間は　別に万一のことがあった場合のことまで考えて　東京にいる家族の将来を保障する保険にまで入れておいてくれたのにはびっくりし　かつ感謝した次第である．

（筆者は鉱床部　非金属課）

▽　▽　▽
▽　▽　▽

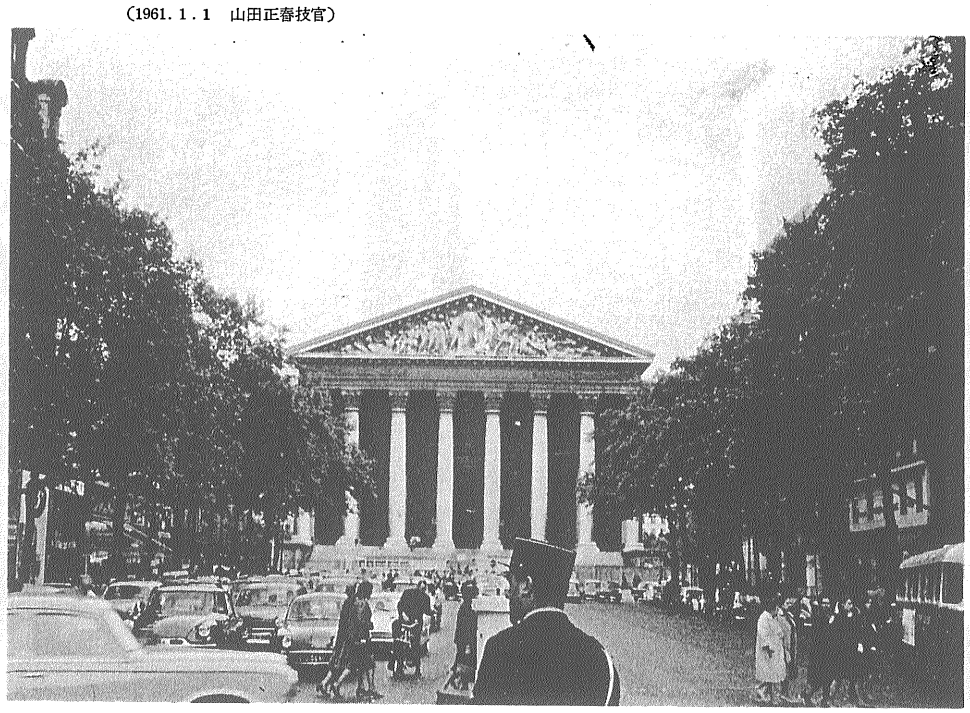
▼ 凱旋門は　高さ49m幅44mにおよび各面には著名な浮彫の群像がある　最も有名なものは　向かって左側の柱の向う側にあるフランス彫刻界の傑作の１つリュード（Rude）作のラ・マルセイエ-ズである　　凱旋門は1806～1836年にナポレオン皇帝の勝利をたたえるため建築家シャルグランによって建てられたが　工事が遅々として進まず　ナポレオン失脚の時やっと地上６ｍしかできていなかった　　落成式は1836年ルイ・フィリップによって行なわれ　1840年12月15日ナポレオン一世の遺骨をパリに運びその葬列は凱旋門の下を行進した　現在第１次世界大戦（1914～1918）の無名戦士の墓として国の礼誉の象徴となっている　　272段の階段を上って（エレベーターがある）頂上に出ると　パリーの美しいパノラマを見渡せる

▲　パリー　リヨン駅前（Gare de Lyon）のメトロの入口でぼんやりとすごす人（左のベレー帽姿）

▲　凱　旋　門　に　て

（1961. 1. 1　山田正睿技官）

▲　マドレーヌ寺院横でハーモニカを吹いて物ごいする人



◀

マドレーヌ寺院の正門

マドレーヌ寺院はナポレオンが凱旋門の構想をいだく前にこれを兵士の栄光のための寺院にしようと考えていたということで　内部はローマの寺院に似ている　外陣・側廊・鎮堂にも十字架さえなく寺院であることを示すものもない

1842年から一般の礼拝に公開された